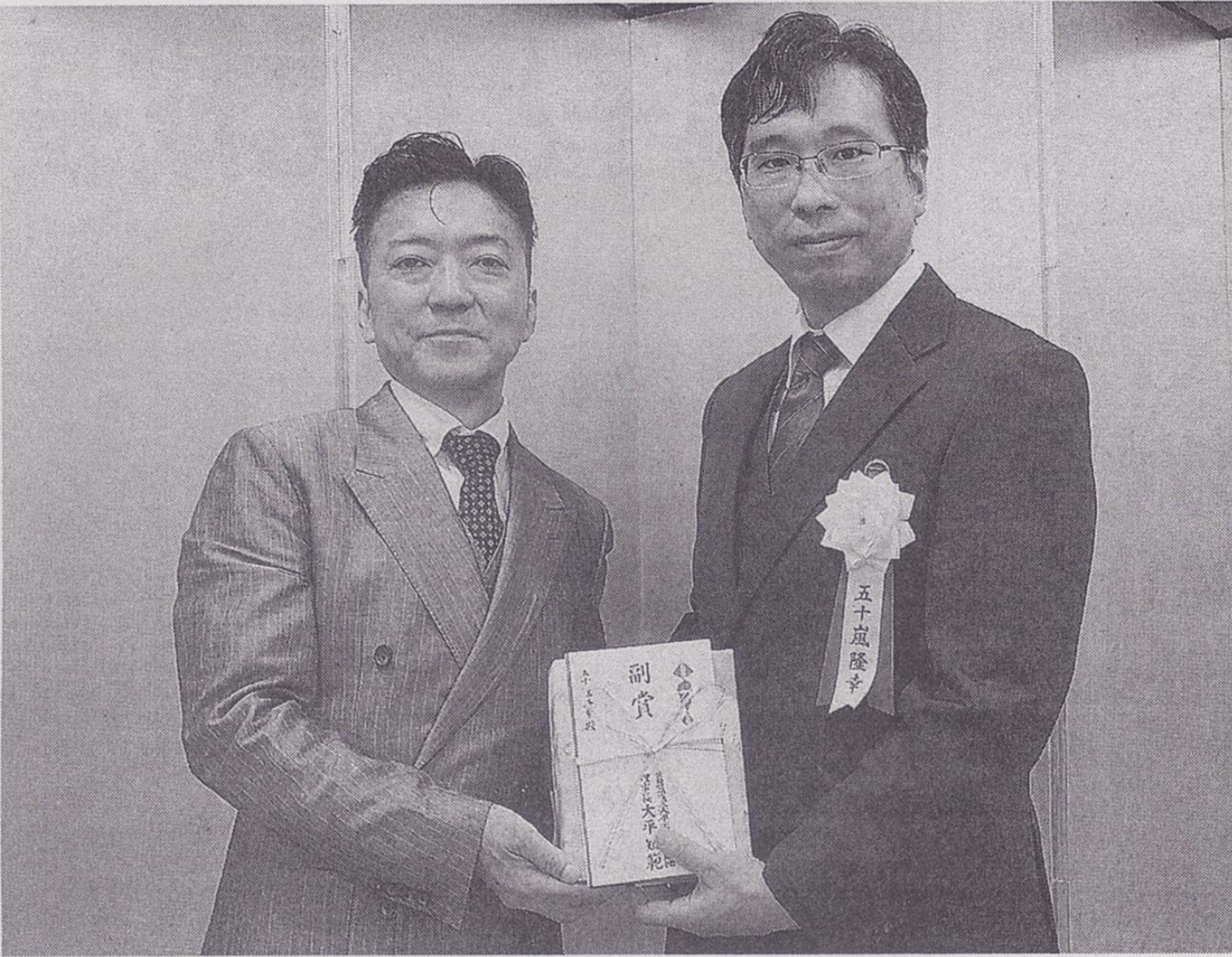


# 大平正芳記念賞に五十嵐准教授

## 台湾の「大陸反攻」の真実描く

【防大】故大平正芳元首相が提唱した「環太平洋連帯構想」の発展に貢献する政治・経済・文化・科学技術に関する優れた著書などに贈られる「大平正芳記念賞」の贈呈式が6月10日、東京都新宿区のホテルグランドヒル市ヶ谷で開かれ、「大陸反攻と台湾―中華民国による統一の構想と挫折」(名古屋大学出版会)を執筆した防衛大学校統率・戦史教育室の五十嵐准教授(47、3陸佐)が現役自衛官として初めて同賞を受賞した。

防衛大学校統率  
戦史教育室 現役自衛官として初



現役自衛官として初めて大平正芳記念賞を受賞し、大平理事長(左)から表彰される五十嵐准教授(6月10日、東京都新宿区のホテルグランドヒル市ヶ谷で)

同賞を主催する大平正芳記念財団は「環太平洋連帯構想」に関する学術研究などの奨励助成を行うことを目的に、大平氏の急逝後の1985年に設立され、これまで贈呈式を行ってきた。

38回目となる贈呈式には五十嵐准教授をはじめ受賞者6人が出席。大平氏の孫である大平知範同財団理事長から盾と副賞を授与された。防大関係者の受賞は、武田康裕氏(元人文社会科学群国際関係学科教授)以来20年ぶりで自衛官としては初めての栄誉となった。

受賞作『大陸反攻と台湾―中華民国による統一の構想と挫折』は、中国大陸を奪還する台湾の軍事任務「大陸反攻」を解明し、歴史的視野で台湾海峡危機の全体像を描き出した二冊だ。

五十嵐准教授は防大で防衛学教育を担当し、学生に対し古代から現代にいたる主要な戦争の概観、本質、

変遷など防衛学の基本的・基礎的知識を教育してきた。執筆にあたり、資料収集やインタビューなど10年以上にわたって研究を地道に積み重ね、成果を取りまとめた。

従来の研究では台湾の「大陸反攻」は「1970年ごろに自然消滅した」と評される中、五十嵐准教授は自衛官としての観点で歴史を再検証。中国大陸を奪還するため、政府が軍隊に与えた任務であることから、「任務を解除するためには、命令が必要では」という自衛隊の常識をもとに歴史を再検証し、大陸反攻任務は実際には91年に解除されたことを明らかにした。

受賞後、五十嵐准教授は「防衛省・自衛隊での勤務経験がなければ、世に送り出すことができなかった研究成果だ。これまで指導していただいた上司、常に刺激を与えてくれる同僚や学生を代表して受賞させてもらえたと思っている」と喜びを語った。

本掲載は朝雲新聞社から許可を頂いております。